

# <広島原爆71年>惨禍の伝承学ぶ

we support ↓



MONTHLY

「東北に黒龍を送ろうー大作戦しんぶん」改め  
復興支援『すけさきた』  
かめぼしと  
しんぶん

「すけさきた」とは  
宮城県登米市あたりの言葉で  
「ボランティアに来たよ」という  
意味である

SEPTEMBER  
11  
2016



東日本大震災の津波で児童と教職員計84人が犠牲となつた石巻市大川小の卒業生2人が5日、広島市の「原爆ドーム」を初めて訪れた。戦争の悲惨さを象徴するドームが曲折を経て保存された歴史を確認。震災遺構として保存される母校を通じ、命の大切さを伝えていく必要性を学んだ。

訪問したのは、大学生佐藤そのみさん(20)と専門学生紫桃朋佳さん(18)。交流のある広島市の中学生らが行った。

1945年8月6日に原爆が投下されてから71年。佐藤さんは戦禍を今に伝える遺産の意義を肌で感じた。「いろいろな人の無念さが詰まっている。さまざまな努力があつたから、特別な場所であり続けた」

2人は保存に至つた過程を知る学校法人広島女学院(広島市)元理事長の黒瀬貞一郎さん(75)から話を聞いた。

原爆ドームを巡つては戦後、「被爆体験を思い出させろ」と解体論も根強かつた。だが、16歳で亡くなつた被爆少女の日記をきっかけに保存を求める署名運動が始まり、66年に広島市議会が保存を決議した。

黒瀬さんは「多くの人が無念の死を遂げた悲しさを語り継ぐのは人。忘れてはならないことをどう伝えていくか。それが大事だ」とア  
ドバイスした。



原爆ドームを訪れた佐藤さん(左)、紫桃さん(左から4人目)

2人は2011年3月11日、ともに大川小に通つていた妹を亡くした。「同じことを繰り返してはいけない」と2人を含む卒業生の男女6人が14年3月、「チーム大川」を結成。学びやの保存を公の場で訴え、亀山紘石巻市長は今年3月、校舎の全体保存を決めた。「未来の命を守るため、何を伝えていけばよいかを若者世代と話し合つていきたい」と言う佐藤さん。紫桃さんは「原爆ドームは今でも保存に反対する人がいる中、特別な場所になっている。大川小の校舎も地震や津波の恐ろしさを後世に伝えるきっかけになればいい」と話す。

2人は6日、広島市の平和記念式典にも参列し、被爆者らとともに71年前に原爆が投下された午前8時15分に黙とうした。

式典後、原爆ドーム近くで被爆者の寺前妙子さん(86)の話を聞いた。寺前さんは爆心地から約550メートル地点で被爆し、顔に大けがを負つた。妹は原爆の犠牲になつた。「戦争であれ、震災であれ、大切な人と離れ離れになつた悲しみは同じ。強く生きてほしい」と2人に語り掛けた。



寺前さん(左)の話に目を傾ける紫桃さん(中央)と佐藤さん

大川小5年だった妹を亡くした紫桃さんは、入院先から参列した寺前さんをいたわり、「聞いた話を忘れません」と今後の人生の糧にすることを誓つた。

ボランティアガイド村上正晃さん(23)の案内で原爆ドーム周辺も巡つた。被爆者らの聞き取りを重ねる村上さんは「原爆被害は続いている。当時のことをつらくて話せない人もいます」と伝えた。

佐藤さんは「村上さんは何があつたのかをしっかりと伝えようとしていた。私も大川小を通じ、全ての人にとって大切なことを伝えていきたい」と話した。

## 9月3日、竹富町で「県総合防災訓練」が実施されました



きれいに草刈りされた避難路を  
励ましあいなから駆け上りました!

防災訓練の日、みなさんはどこにいて、どこに避難をしましたか?

私は職場のある集落で避難訓練を迎えることになつたので、県道沿いの「避難所入り口」の看板だけを確認して「近いから車では行かないほうがいいだろうな」などと計画をたてていました。しかし、いざ放送がかかると、全文読み終わるまでジッと聞き入ってしまった(聞きながら動けばいいのに!)車からナタや飲料水を持ち出してみたり、「本番ではブレーカーを落としたほうがいいのかな」と場所の確認をしてみました。あまり迅速に出発することはできませんでした。また、県道から高台の避難小屋までの坂道は思いのほか長く、「あとこのくらいで着くのかな、一回行つておけばよかったな」と反省しました。

避難所に集まつたのは15名ほどで、公民館役員がほかの避難先と連絡をとりあつて住民の避難を確認していました。

訓練中や、解散後の帰り道で、小さい子から大人たちまでが「津波は第2波のほうが大きいんだよ」「道路に電柱が倒れたりしたら、やはり車では逃げられないこともある」などの「防災知識」を交換しあつていたのが印象的でした。訓練はこのような「知識の更新」の場としても役立つのだな、と感じました。(井上)